

いわゆる ” シコタンタンポポ ” の形態比較

苫小牧市 小玉 愛子

はじめに

シコタンタンポポ *Taraxacum shikotanense* Kitam. は、北海道に生育する大型の在来タンポポで、海岸、れき地などに生育し、平成 12 (2000) 年度版環境省 RDB では絶滅危惧 IB 類とされていたが、それ以降はリストから外されている。

小川 (2001) および保谷 (2017) によると同種やエゾタンポポなど北海道の低地に自生する在来種のタンポポは高次倍数体で、受精や減数分裂を伴わない無融合生殖により繁殖するため、個体間での遺伝子の交流が無いとされている。このことから北海道の低地タンポポは系統分類が難しく、シコタンタンポポも生育地によって個体の形態などが異なっていることが本研究で明らかになりつつある。

本報告では、形態の分類と比較・検討まで行うことは不可能であったが、北海道各地でシコタンタンポポとされている種の生育環境や形態的な特徴を調べ、頭花の大きさ、小花数、総苞片の形態などを産地間で比較した。

本報告での ” シコタンタンポポ ” の定義

滝田 (2001) によると、シコタンタンポポは頭状花の直径 (以降、花径とする) が 5cm 以上で、総苞は内片・外片ともに大きな角状突起があり、ロゼット葉は長さ 20-30cm になるとされている。また、北村 (1981) によると、花径は 5cm 以上、

総苞は黒緑色で長さ 17-20mm、外片は卵状長楕円形で縁は白く、上部に小角があるとされている。

なお、シコタンタンポポと同様に北海道の低地に生育するエゾタンポポは、上記いずれの文献でも「花径が 4cm 以下、総苞外片 (内片) 上部の突起は無いか不明瞭で、総苞外片は卵形～広卵形」とされており、花径と総苞の形態の違い、総苞外片・内片の形態の違いによりシコタンタンポポと他種タンポポを区別できると判断した。

一方、生育条件によっては被圧により花茎やロゼットの葉は矮小化することも多く、色変わりも多くなるため、葉や花茎の高さといった形態は考慮せず、「花径が 5cm 以上で、総苞内片・外片ともに突起が認められるタンポポをシコタンタンポポ」として扱うこととした。

観察地

本報告では (1) 苫小牧有明海岸、(2) 苫小牧植苗南東部、(3) 苫小牧拓勇公園、(4) 白糠町路肩、(5) 豊頃町湧洞沼、(6) 野付半島ビジターセンター散策路で観察したシコタンタンポポの形態的な特徴と生育環境を記載する。なお、調査地の多くは保護地区であったため、標本の採集は行わなかった。

(1) 苫小牧有明海岸 (図 1-4)

環境

北海道南西部の太平洋岸に位置し、苫小